

## 10 日本における臍風の記載について

広田 曄子

臍風は撮口ともいい、現代でいう臍破傷風のことだっ  
たと思われる。『医心方』以来、日本の医書の中で、どの  
ように掲載されてきたかを述べる。

現存する日本最古の医書『医心方』（九八四年）には臍  
風の記載はない。

平安時代に著された『万安方』（一三二五年）にはかなり  
詳しく臍について書かれている。三十九卷の二に断臍法  
という項目があり、その中に、もし臍汁が尽きざる者は  
自ら寒を生じ、児をして風臍を作らせる也、とある。ま  
た、同じ項に臍を乾燥させないままにしておくこと口禁し  
て小児は救えない、とも書かれている。その他、『莊氏家  
伝』、『聖恵方』、『漢東王先生家宝』などから臍の手当ての

仕方や臍風の治法は書かれてはいるが、撮口だと大略は  
救えないと書いている。

『福田方』にも撮口の項が設けられている。小児の臍  
は湿っているが、早く治療しないと臍風瘡となる、とし  
て当帰末や礬石を炒つたものをつけるように述べている。  
室町時代に入って田代三喜が著した『三帰廻翁医書』  
のうちの『小児諸病門』には臍風や撮口についての記載  
はない。

また、曲直瀬道三の『遐齡小児方』には、難産の場合、  
臍帯を焼くと気を生ずる、とはじめて焼くことが記載さ  
れている。

江戸時代初期の『古今幼科摘要』にも撮口と臍風の項  
がある。断臍時に風湿に傷られるためにおこり、臍腫脹  
して口撮し、啼いて乳を飲めなくなるとしている。治療  
法は蝸稍、硃砂、麝香、防風、釣藤などによる内服薬が  
主である。

また、『医方問余』にも臍風、撮口の項があり、生後七  
日以内に患った場合は十に一つも助からないことを『医  
書大全』から引用している。

さらに『保嬰三方』では、臍風の原因は胎毒であるとしている。治療法も記載されているが、予防法については記されていない。

江戸時代中期の『真斎謾筆』には、臍硬腫に対して消臍丹を外用として記しており、もしも臍に青筋を出し、腫脹する者は死する也、と述べている。

江戸時代中期の香川牛山著『牛山活套』の小児雑病の項にも、断臍時に注意しないで沐浴させるとその断目から水湿が入って臍風、撮口となつて救い難くなる、と記載があり、内服、外用薬を挙げている。

江戸時代後期になつて、原南陽の『医事小言』が著されたが、これには、生後少くとも五、六日して臍が乾いたのを確かめてから入浴させるべきだと述べている。また、入浴後二、三日経つて発症したものは死なないけれども病身となりやすい、としており、これは破傷風が潜伏期が短いほど重症で致死率が高いことと一致する。

『提耳談』には臍風についての記載がないが、『校正方輿輓』にも、また、『保嬰須知』にも、臍が水湿を受けなないようにすべしとか、臍をしぼつて切つた後に灸をする

と臍風を免れる、といった予防についての記載がある。

以上のように、臍風に関しては、『万安方』以来、臍湿が問題となつてきており、次第に予防を強調する傾向にある。臍をしぼつてから切断したり、切断したところに灸をしたり、沐浴を控えさせたりといったことだが、これらは有効な手段だつたと思われる。

(擘小児科内科)